



発表資料作成 POINT

症例報告の場合



目次

.....

01. 『はじめに・背景・目的』の書き方

02. 『症例紹介の書き方』

03. 『介入方法・経過・結果』の書き方

04. 『考察・結論の書き方』

01 『はじめに・背景・目的』の書き方 ①

「はじめに」は発表内容のストーリーを決める部分のため、非常に重要な部分です。
関連領域の先行研究を調査、引用して記載しましょう。

先行研究で何が明らかになっていて、
何が明らかになっていないのかを明確にする

例 脳卒中後の歩行能力の回復には短下肢装具（AFO: ankle-foot orthosis）の適用が有効とされているが、
既存の研究の多くは発症早期の介入に焦点を当てており、
発症後6ヶ月以降の慢性期における装具適用の意義は
十分に検討されていない。

01 『はじめに・背景・目的』の書き方 ②

この症例検討の意義や目的を明確にする

例 慢性期では、**神経可塑性の限界や異常歩行パターンの固定化**が進み、自然回復の余地が少ないと考えられるが、適切な介入によって歩行能力の向上が期待できる可能性がある。今回、発症後6ヶ月の脳卒中片麻痺患者に短下肢装具を適用し、**歩行能力の向上を認めた症例を経験したため報告する。**

02 『症例紹介の書き方』

読者に症例像と「何が・なぜ問題なのか」を伝えることを心がける

① どんな症例か？

診断名や現病歴

主訴、
治療および経過、等
簡潔に！

② 理学療法評価
臨床的思考

どの時点の
評価？

なるべく
客観的な情報を
使用

必要な情報を
過不足なく
記載する

03 「介入方法・経過・結果」の書き方

いつ介入して、いつ評価したのか

どんな変化があったのか（どの時点のデータを比較したのか）

→ここが不明確だと、本当に介入の効果があったのか曖昧になってしまう

介入方法

- なぜその介入方法に至ったのか
- 介入方法は具体的に記載（頻度、強度など）

経過結果

- 2つの時点（初期評価－最終評価）で比較
- 経時的な変化を示す

04 『考察・まとめの書き方』

考察

- 介入によって効果は認められたのか
 - なぜ・どのように効果をもたらしたのか
 - この結果が示す新しい知見
-
- 考察では先行研究で報告されていることを踏まえて、今回の介入方法の意義や研究の限界について記載しましょう。

LET'S HAVE FUN!

